来場者を魅了 最後の作品「母」

年の瀬 記者ノート

柿沼翠流さんの遺墨展

宇都宮市の県総合文化センターで開かれた書家、柿沼翠流さんの遺墨展。多くの来場者が作品を通じて柿沼さんをしのんだ

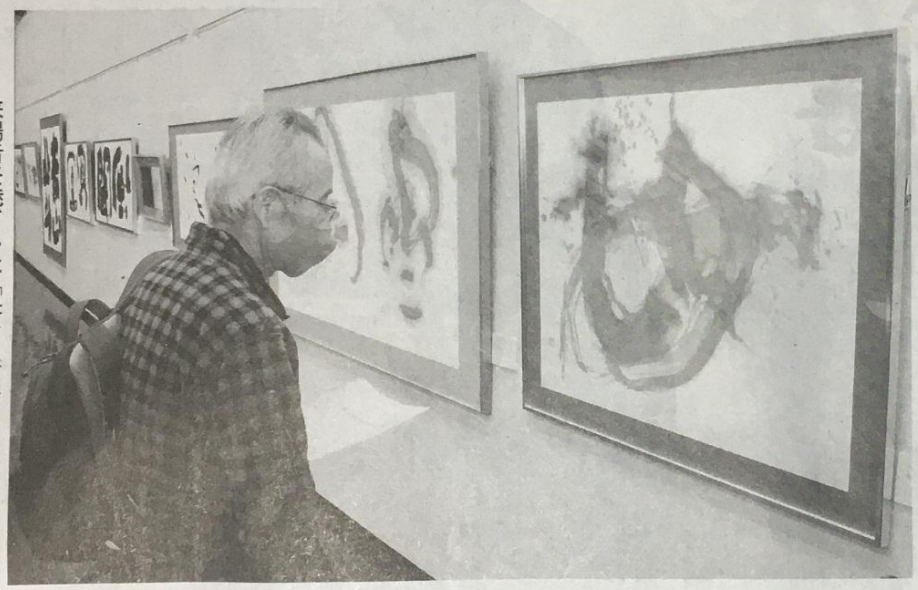
師走に入って宇都宮市で開かれた矢板市の書家、柿沼翠流さん（故人）の遺墨展。取材を兼ね、初日に訪ねてみたが、平日にもかかわらず来場者が多いことに驚かされた。

令和元年に83歳で亡くなった柿沼さん。遺墨展は1周忌を終えた昨年12月下旬に開催予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大で延期に。今秋に入って感染者が減り、落ちつきを見せ始めたため、ようやく開催の運びとなった。

出会いは震災の年

柿沼さんとの出会いは平成23年、東日本大震災の年にさかのぼる。被災地を支援しようと矢板市内で開かれたチャリティーイベントの取材がきっかけだった。

来場者が希望する1字を柿沼さんが色紙に書いて販売。売り上げは義援金として被災地に寄付された。チャリティーは熊本地震や九州北部豪雨のときにも続けられ、取材を通して柿沼さんとのつきあいは深まり、自宅にも度々招かれた。



来場者を魅了した「母」（右端の作品）＝宇都宮市の県総合文化センター

塩谷町出身で元教師の柿沼さんは、子供の頃から走るのが好きで、学生時代は陸上競技（中長距離）に明け暮れ国体にも出場。教師となってからも陸上競技の指導者として活躍した。そしてもう一つ、子供の頃から興味を持ち、才能をみせたのが書道だった。

手島右卿賞を受賞

「昭和の三筆」といわれた手島右卿（ゆうけい）に師事。毎日書道展で最高賞の毎日賞を射止め、中堅作家海外選抜カナダ展で国際賞、独立書道展では最高の会頭賞（手島右卿賞）を本県で初めて受賞した。

出会ったころの第1印象は、「元気のいい書道塾のおじいちゃん先生」といった感じだったが、その足跡を知り、作品にも触れ、本県を代表する書家であることを知った。

遺墨展では手島右卿賞を受賞した代表作「はふり火を…（斎藤茂吉歌）」が約10年ぶりに公開されたほか、晩年好んで書いたという漢字の造形性を強調したアートのような少字数書も数多く展示された。

中でも、多くの来場者を魅了したのが、最後の作品ともいえる「母」。葬儀の前日、自宅で作品の中から遺族が見つけ、葬儀会場にも飾られた。

爽やかな魂の爆発

この作品を目にして最も衝撃を受けたのは、同じ書家の道を歩んだ次男の康二さんだった。呆然（ぼうぜん）と作品を見つめ、「この書は俺には書けない」と兄の正さんに告げたという。今回の遺墨展を監修した康二さんは、同展の図録の中でも、その時の衝撃を以下のようにつづっている。

「『母』が出てきた。突き放され言葉を失った。体が震え、そして涙が出てきた。（中略）培った感覚と哲学がこの一瞬のパフォーマンスの中に凝縮し、父らしい爽やかな魂の爆発となった」

日本の教育現場から書が消えつつあることを憂慮し、亡くなるまで書道塾を続けていた柿沼さん。心を込めて文字を書く大切さを伝えていた。私もたまには筆をとってみようか。買ってきたばかりの年賀状を前に、柿沼さんから優しく背中を押されている。

（伊沢利幸、写真も）

◇

さまざまニュースが県内を駆け巡った令和3年。現場を取材した記者の視点から1年を振り返る。

栃木
TOCHIGI
宇都宮支局
〒320−0027
宇都宮市塙田1−
電話　028・621・
FAX　028・650・1
utsunomiya@sank
広告　028・622
購読申し込み
配達・集金
0120・34・46
紙面・記事
0570・0464
Web
https://www.sank
/region/
(28日
旧11月2
《大安
あすのこよみ
月齢……
日出……
日入……
月出……
月入……
満潮…
干潮…
長潮……
新型コロナウイル
栃木県の主な電話相
0570・052・
受付時間
24時間対応
（土日祝日を含む

アプリで子育て世代を共助

Uスマート推進協の実証開始

宇都宮
る「U
「アプリ
い促進プ
2月末
先進
共生社会
ートフ
者同士の
援。園、
設定し、
あえる
対象は
アプリで
交換が
する。
供の送
のとき

「アメリカ輸出発送式」

近県

ニュー

JA会津よつば（会津若松市）は、東福島第1原発事故後産食品の輸入規制を撤廃した米国へ向けの発送式を行った＝福島県によると、原